

特別展「松江城大解剖－城郭そして城下町－」記念講演会にかえて

コラム（１）

－近世大名の儀礼行為－

はじめに

新型コロナウイルスの影響で、特別展「松江城大解剖－城郭そして城下町－」は、現在会期を変更して開催されている。この間の展示に関わった方々のご努力に改めて敬意を表したい。

筆者はこの展示会に関連して企画されていた講演会で、「近世大名の儀礼行為と磁器の利用－江戸藩邸と松江城下町出土資料－」という題目で話をする予定だったが、関連イベント中止になり、残念な思いをしていたところ、展示担当の木下誠さんからコラム執筆のお話をいただいた。

本コラムでは、江戸時代の城郭・城下町、大名にとっての江戸と領国の関係を見ていきながら、儀礼行為と磁器の利用について紹介したい。

近世城郭と城下町

最初に、近世という時代の城郭と城下町、江戸と領国について簡単にお話しておきたい。戦国時代後期の16世紀後葉には、広域な地域を領国化する勢力が出現してくる。城郭の構造は、織豊期しきほうに大きく変化し、職能民を取り込む形で近世的な城下町が形成されていく。松江もまさしくそうであるが、こうしてできた城郭は、現在では町のシンボルとして、城下町は、変容はしているものの現在に継承され、そこに住む人たちの歴史に大きく関わっていることになる。

近世城下町は、町人は兵農分離によって専門化した武士の消費を支える一方、自らも城下町の構成員として、領国における大きな消費マーケットに成長していく。武士は将軍を中心として構成される為政階級で、将軍の定めた法令、嗜好などを規範とする生活様式が維持され、城下町における最大の消費者となる。こうした近世の城郭・城下町の性格こそが、モノの消費に大きな影響を及ぼすことになるのである。



【写真1】松江城下絵図（天保年間頃）松江歴史館蔵

江戸と領国

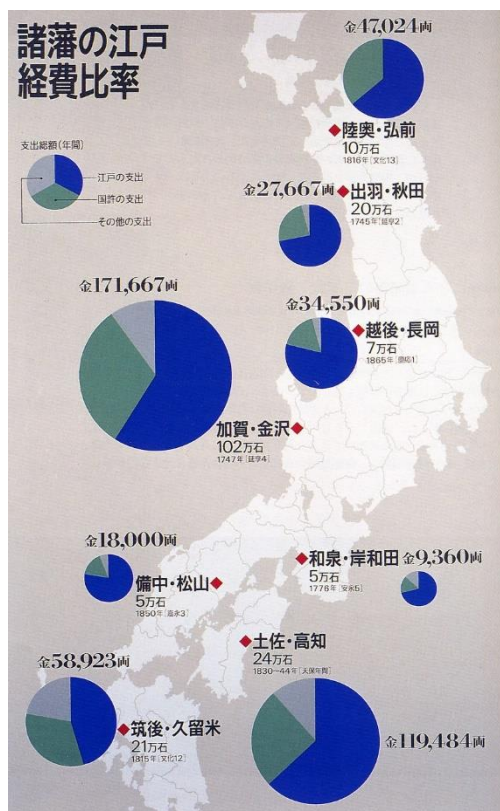
江戸時代には大名の正妻、嫡子は江戸に居住することが義務づけられていたことは、承知している方も多いだろう。通常、正妻から生まれた男子は長じて次代の大名となるので、江戸で生まれ、江戸で育った大名は多い。また、襲封した後は、参勤交代で江戸と領国を隔年で往復することになる。他方、将軍に対する奉公が最顕要な大名の職務であるので、大名にとって江戸は重要な場であり、その中心として機能した江戸藩邸の役割は大きかった。

このような江戸の性格を規定する重要な法令である江戸置邸妻子収容の法と参勤交代制度は寛永年間(1624～43)に出され、江戸の城郭・都市整備も寛永期に一定の完成を見ることから、こうした時期に近世武家の活動様式が成立したと思われる。一方、領国城下町は城、武家地、町地、寺社地が包括される基本的な構造は江戸と同じである。さらに大名の生まれ育ちや嗜好、奉公の場である江戸との関係が濃密である点から、武家の消費様相や動態は江戸との共通性が高いものとなり、江戸期を通じて江戸の縮小版という側面を有することになる。

このことは、多くの藩で江戸における支出割合が総支出の過半を超えていたことでも理解できる【図1】。これを見ると江戸で役職などに就いている越後長岡藩牧野家や備中松山藩板倉家など譜代大名が、特に多くの割合を占めており、家柄によっても違いがあることが分かる。松江藩に照射するなら、親藩大名としての江戸や領国の活動も、出土資料を見るにあたっては重要な情報となろう。



【写真2】 東京大学本郷構内の遺跡発掘調査状況 (加賀藩邸梅之御殿跡)



【図1】 諸藩の経費比率 (江戸東京博物館編 1997『参勤交代』より)

堀内 秀樹 (東京大学埋蔵文化財調査室 准教授)